謝　　辞

坂　田　薫　子
（英文学科教授）

三神和子先生は、1990 年 4 月に本学にご着任され、以来 30 年間にわたって英文学科の専任教員として教鞭を取ってこられました。1980 年 4 月から本学文学部の非常勤講師として学生の指導を担当してくださった期間を含めますと、合計 40 年という長い年月を本学全体のためにご尽力くださったことになります。

三神先生がキャサリン・マンスフィールドやヴァージニア・ウルフ研究の第一人者でいらっしゃることは、ここで改めて紹介する必要のないことではありますが、三神先生は本学にご着任以来ずっと、小説を中心とするイギリス文学の授業をご担当されてこられました。三神先生の授業を聞き、イギリス文学研究の魅力に引き付けられ、卒業論文でイギリス小説について論じることを選んだ学生が数多くいます。私は三神先生が非常勤講師として本学で教鞭を取っておられた時期に本学の学部学生として英文学科で学んでおましたが、一年生のとき、当時は「英語講読 b」と呼ばれていた通年の必修の授業で、三神先生にイギリス小説の読解法を教わりました。高校を出たばかりで、それまで、英語で書かれた小説を原典で読む目的は、いわば受験のために英文法を勉強することにあった、と言っても過言ではなかった私たちは皆、のちにノーベル文学賞を受賞することになるドリス・レッシングの短篇集を用いて小説の読み方を分かりやすく説明してくださる三神先生の授業に、深く感銘を受けたことを今でも鮮明に覚えています。

三神先生は本学にご着任以来、学科科目では「イギリス文学史」や「イギリス小説演習」などの授業を、そして全学対象の科目としては「女性と芸術」や「リーディング」などの授業を長くご担当され、イギリス文学分野の教育の中心を担われてきました。三神先生は常に分け隔てなく、親身になって、しかし決して甘やかすことなく、学生一人一人の指導にあたられてきました。そうした三神先生のお人柄に触れ、先生のご指導のもとで卒論を書きたいと希望する学生が毎年数多くいました。そしてその後大学院に進学し、引き続き三神先生のご指導を仰いだ大学院生たちの多くが、現在、イギリス文学研究を専門とする中堅教員として活躍しておりますことは、皆さまもご存知のとおりです。

大学全体における三神先生のご貢献も大変大きなものでした。学部において英文学科長を、大学院において英文学専攻主任をご担当いただいただけでなく、2012 年からは総合研究所所長を三期にわたって、そして 2014 年からは文学研究科委員長を二期にわたっておつとめになられたうえに、2016 年から 2017 年の間には理事をもおつとめになりました。

こうしてご多忙なときを過ごされていたにもかかわらず、三神先生はご自身の研究も着実に進められました。国内外の学会の大会で積極的に口頭発表を行われ、学会誌や紀要へ精力的に論文を発表されてこられました。これまでに単著『楽園を求めて――キャサリン・マンスフィールドの研究』や『キャサリン・マンスフィールド――世紀末、モダニズム、芸術家』を上梓され、近年では 2017 年に編著『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』を出版され、そして今年の 3 月には『イギリス 20 世紀初頭の女性群像』を共編で刊行する予定でいらっしゃいます。

このように三神先生が教育、研究、学務に誠心誠意取り組んでこられたことに、英文学科の教員一同、心から敬意を表したいと存じます。また、三神先生のそうした姿勢を受け継いで参りたいと思います。30 年の長きに

わたり英文学科を支えてこられた三神先生が 3 月末で大学を去られてしまうと思うと寂しい限りですが、三神先生のご退職に際して、これまでのご尽力、ご指導に改めて深謝の意を表しますと共に、三神先生のご健康と、さらなるご活躍をお祈り申し上げ、謝辞とさせていただきたいと存じます。

2020 年 1 月